

優秀賞

中学生部門

福岡県久留米市
国立福岡教育大学附属久留米中学校3年
藤丸 美都

たつたの一言

私は小学一年のときに、剣道を始めました。けいこの時は毎回親が道場について来て、終わるまで見ていてくれました。当時の私は、体が小さくおとなしかったので、多分できるかが心配だったのだと思います。

しかし、毎回毎回二時間近くけいこを見てみると、実際はやっていない父の目も肥えてくるようで、そのうちけいこが終わってから風呂の中でも、食事中でも、

「足がとまって前に出ていない」とか「声が小さくて気合が入っていない」などと言うようになりました。

はじめは聞いていましたが、毎回毎回けいこの度にずっと言ってくるので、ふだんは父に逆らうことなどなかった私がとうとう我慢できずに言い放ってしまったのです。

「先生でもなくせに」

ハツとしたような顔をして父は黙ってしまい、それから剣道の話はしなくなりました。

でもある日のけいこから、それまでは座って見ていた父が手に入れた竹刀で鏡の前で素振りをするようになりました。そのうち、防具と道着を用意して、道場の先生に挨拶に行き、小学生の私達と並んで基本稽古をするようになりました。

その時の父は四十歳。私たちと同じ内容の稽古をする事は大変だったらしく、しばらくは毎晩足がつっていたようです。

でも、父は私に言われて思ったのだそうです。

「やってもいない人から言われても聞かないのは当然だ。話を聞いてもらう為には、自分もやってみないとね」

その父も、今年四十八歳。剣道四段になり、立派に道場の先生。

小学一年生の何気なく言ってしまった一言で、今でも父は剣道を頑張っています。